

天明三年  
通神  
講釈  
三教色  
全  
唐末三和作  
うた磨画

~13  
1963  
49





宗傳作

通神三教色完

宗傳



一 秋風起つて帷子飛鳥同本後是  
 て借皆せがむ予が神代釋尊たう  
 けめて困窮中ら孔丘中道子以  
 せうと相後おまの志水あん十  
 博場の利息子居催候はし中す  
 未白川の勢方繁の事紙の書出し



と持糸糸一始末使身迹ち後して  
後在家の悪客増長して姉妓苦  
め奉り盃を傾んと欲然ハ新臺の  
嘘贅よ任せ且ハ卓上の砚蓋を  
あせてあゝ睡落の小冊と著せては  
と不間の打身よてまこどり後ハ  
茶間ちの志申れかうべとひきて

ちくあつと大窓てんくくく  
勸られられハ予志申れきりく  
てきかんとて曰燕十あんど大通  
のふをきりんや喜ぶ糸身徒堂  
文勢を俣俣して筆の乱抗透間  
もあゝ鉄鉋中くくに打あ  
たる一冊を大文粹に方の先生め



口入めて裏門好のよむの題号  
を対うりして飛んど彩板彩吉系  
いと心客子大門は大堤下薛羅  
館の耕書堂下質の俵州を並  
奉茶の如し

① 一とんを三教一部  
上より受けるよ

道子孔子の儒書了

晒書何流の給了  
他よりけり

山又書  
紫巻書何流の給了  
初に傲首偈摩の給あり

書本



千  
九  
一  
二

書之

唐来多尔和



情人

忘水多入十



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

通神 三教色

前座

三聖邂逅

四季繁華曰孔子名丘仇若通其先通人  
父者行不簡母者俠氏以其女郎二十二  
歲年明之歲十一月庚子生孔子於此昌  
平橋水道為兒嬉戲常唱河東叅青樓及  
長成意氣浪浪度度也ふとことどけけ  
へ嘘めして鬚長の骨長髪山の齒小もあ



とわぬ雲屋の石段合吉房も境をわけて降  
糸と云れた文皇王もを幸上り大通の乃  
隆盛んあつてうぶかーうかれの父んく  
て移ふのいんんはうく浮きをものひ  
移ふよ今の昔と遠のゆてゆける清光と  
る世の中に是境をうて仁義禮智信のみ  
為青表紙のる吉を自業自得なをん  
はんより意ふの一寸く幕をんで時く

巧言令色の面ををりくんくと先大目  
幸華北東都昌平橋の出店小引紙一  
風流英繁ををりて二階三階の家居を  
えて邦君樹塞門といふよおひ庭よの冬  
木を植込立物好利休宗且子扱を碎さ  
せ門よの東江流で大通亭と云つる額を  
挂子踏を人を石伝ひ六藝も何あやう  
禮小の初笑衣裳之舎級日お日れおびの



不方樂の將として、若菜河東節とふれを  
射へ愛して揚弓と和らけ、御へ浮雲うら  
に、よよふ少々の書へ細見滑靴、半小眼と  
ら、一數へまひららとを化令のメ々んと  
か、一惣を天憲を女田子、結らせ着物、け  
長く、身幅、度きを不厭、襦半の衣、紋首  
小、是にけ、帯力細ふ、一之、髪、の、ど、く、之、髪、を  
ち、く、限、煙、管、筋、さ、ぐ、り、天、生、通、放、予、と、さ、る

傍の鼻、初松、鼻より、さく、能く、然として、  
ち、け、乃、を、好、この、之、を、通、不、狐、必、有、隣、甚、と、ろ  
南、膽、部、州、豊、秋、津、洲、地、神、五、代  
天、照、皇、太、神、宮、も、甚、に、若、菜、河、東、節、と、ふ、れ、と、く、編  
あ、ら、ず、倚、より、ら、ぬ、此、も、礼、甚、と、さ、せ、終、ひ、以、  
屋、根、の、此、れ、裸、言、も、久、し、い、ゆ、に、定、ふ、不、得、と、  
わ、と、な、あ、り、さ、せ、ぬ、ら、ず、ま、ひ、さ、さ、せ、終、ひ、く、  
乃、く、も、先、く、し、子、當、あ、く、三、下、の、里、門、不、六、根



清澤と拂ひ出しさふぐ城も遠くを繁た  
がなよりハニを後のとう留のどたれ備後小掉麻  
のハツ耳示笑あれた云伏よこゆり給ひしあや  
宮よまきり就く見えしん宗良や春日や三  
痛の神み日之日と夜と明しぬひく八百方  
の神達神傳ひまはとひ言天う系し集あり  
後ひねお澄のうへはひし伊勢の太神御後  
如相を浴有ひのひけは文宣五の所の教屋

と成り給ひしうともぬんかまうと世神酒  
の一口も石あづると一寸先の園雲まけよ  
驕れよ香あ頃くと毎晩く孔子とほれえ  
控里一のこひさう給ふえより孔子由この  
めらるあれの茶屋船高の付屈せりひ禿  
の仁義才を表向と神の名で皆懐より出  
して世話を仕めりより今のそよむるを  
人の振舞いと控ふるを神とやいふあらん











新法しんぽう 三公治長こうぢちやうさんも好このいであらなりや  
せん三 孔われも人らひひさ 大それでも今で  
世帯よせたいでもおろて傾城かひせいでもやめてあるのにお  
の器量きりやうどよ 孔まっとうだうふんごらぬわ  
合あらむひくくぬ 子ホニ 魯國ろこくやうく 一 子 一  
あぐれの書付が来中た狐きつねの衣ころもの不意ふい 三  
おど利上げをせずと流ながくぬ 孔 二 あ  
アヤアたりを去き年の八月席菜せきさいの時とき 二 あ

と元利げんり合あをそとあどらふ 三 二 両の質しち時とき哉や  
時哉ときや 大ころちも代かくぬぐりの天あまの逆さかえを  
ころして並ならかして三種さんしゆの林室りんしつもころひ  
沈しづめて今いまであるのへきせてある十束じゆのち  
太おカをころす 孔 三 ソ リ ヤ ア 何 ん ま は ら ん 大 三  
が大日本おほにほんを吉原きちげん狩からうしてあびやうあ  
しあなう 孔 富 潤 屋 ど 我 差 ふ だ も 見  
徳とくをんぶ 二 白 子 も ち ら と 賞 て ん ご ら せ



因今を感應寺とて見ても大異感應  
 誰坤兌乾孔 せんあつち百萬の神とて  
 ねんであつても仕て世々入り太 せんか  
 事にてもあつて新世世とてあつて  
 八幡ははねねできり中孔 時ふモウ タ  
 食どもふ何んぞうあひめいあつた因 今  
 乾のあまのれ羊の冷汁小瓶の味あけ  
 鶏の貝焼でもうらやせう因 鶏の

おれはとらね孔 信よりせんぞあつたが  
 あつたト 小あつち 釈迦如来時侯の信とあつち  
せうに 初まるとめいせあつち孔 子もあつち  
孔 朋遠方よりあつち事ありま樂 一から  
 ぞや和尚ふんとあつち太 供をさくし福 徳  
太 せんあつちとあつちト 何の中子 子よ  
太 これの宿人よあつちあつち太 同よあつち  
太 ホニほくしあつちあつち太 ちあつち  
 のあつちあつち太 ちあつち











階小及ぎ一席せま及ぎ一かどくごりぞい  
申野の帝みかどがよかどととてむしやう上かみよはとあ  
たふ然し三さんあまをあたの利り合あひがらとた  
まが京きやう 孔くわんコレ野の夫おとこをいりりあめんか何なにでも  
貸かをあう借かるが可べ也 釈しやく急いそ借かの法はう方の赤しやく  
梅うめ檀だんを以もつて麻あし糸いとかしてと並ならと 孔くわんとこの  
はまりのいせんか事ことさ先まづきでちよき結むすばよ糸  
て場ば小こ淨じやうえ我われよあごがよ者もののそれ連つり 釈しやく

ありがそくく 因いんころちぢごりつり日ひ本ほんごと  
いふに癖くせがあると思おもへを和わ尚しやうも説せつ法はうのあり  
がひひらに癖くせある 因いんせんかひひらをのり  
かさるあく今いまか駕かを三さん挺ていえ付つかせう  
り 孔くわん君きみ賞しょうよ仍なほ時ときの加かををけりて仍なほの  
不ふ通つうをささうりしんか 太たいには緒いとくの不ふ  
通つうをいふともんは法はうくのありうまあ  
ず 釈しやく口くち小こ慈じ白はくの五ご妙めうの海うみをいへんり





磨画



でせうちまてく 孔 酒ハ無量不及 孔 和尚も  
 よく呑のこむがるこ 是 子山田屋一 拂さした  
 ちやあへり 太 被ひつても 曳 注連ゆが 結 結むつて居  
 中ちゆうであれども 一 年ねん 出目しゆよりけ 中 せう 結 酒ハ  
 上品じゆうひんの 太 十じゆ 二に 芦あし 糸いと さ 割 小せう 氷ひやう 穂ほ を入いるから  
安 國あに と人にん が め ぬと ト 云い あり 一 破や 引ひ せ て さうく  
子 せん あ ち う け し ち あ 付 を け て 飛 て 教 れ 一  
 やせう 釈 け わ せ ふ 天 蓋 と り 小 を 子 蒸 て

孔 マア そ う さ ち か 付 さ 入 席 一  
 加か され が 不 居 一 因 け し 一 り ち い 後  
 後 く 埃 とい 小 埃 一 あ ち ト 一 因 一 第 先 よ  
 是 神 の 掃 出 不 あり 釈 和 光 同 塵 一 も  
 ち の 小 は づ り の 因 一 ホ 二 ぢ 一 む 一 老 子 が 句  
 一 の 一 よ 一 釈 老 子 一 や 莊 子 一 小 一 ハ 久 一  
 一 の 一 周 一 の 一 一 一 の 一 一 一 の 一 一  
 一 の 一 一 一 の 一 一 一 の 一 一 一 の 一 一



あてかり 一簞食 一瓢飲 ぶどう くらげ ずい  
斗の男 ぶが今でも 負走りの 脱と曲て  
枕とさるを 樂とて 内よ斗居中て 中が  
かかりの 囚おめく どの方でも 目蓮といふ  
人の ちろふ人の ありゆべう びうに 祝  
ふ 孝行 ぶかりの 一生とらうらうの 仕くゆせ  
ぬ におろし 子路 僅利と 酒を いて  
事 銷の 破ごとと ありよと ありて 破も 後

て 来て 是で 微生 高う 不で かりる よ へ  
ぬ 料理 あり 切目 ぶー かり ざれを  
不 喰 ぶせ 又 例の ぢい を 煮ゆ せ 是 以 君  
子の 庖厨 を 遠ざく 久い めんご 中て  
せいの 斗 笑ふ せ 如 来 さん 子路  
がう ところ くの う せ くれ が 切らふ  
に ぐ あり 精を 料理 ぶ や ア たり  
あまを あふ どの の 檀特山 の 阿羅 甚 系 依



羅刹の妻仙人の仕う料理もあつた  
 およそいへぬ因 おれが湯屋の金が少  
 て居るをぐざかんを付さるせく 先別仕  
 中申たサア 亭之役小はじめて和尙  
 中せう 釈かこす ごとく由先ア 是の  
 ういね報謝でござりはす 太 おきやア  
 トの指子よ 釈 南を阿弥陀佛酒と  
 酒がこがれる 南を阿弥陀佛酒とこが  
 神も南を之室といひ 孔 酒といへば  
 かぐろめはねと重なる 孔 酒といへば

成るのみ 釈 成る不うかぞん 其赤よあつて  
 寄よ九年母斗りつて居るのふそれ  
 由不立文字教外別傳ふとく意なき  
 不を棄して人をば登と斗りて居るよ  
 太 不許林示酒入大門とあやしとぞんて  
 好でふくてとままるのぞ 孔 おうぐさ  
 ても妻氏ふどの山事で大が尙とそふ  
 で八一の利合で合と方くおまじい家 釈











て来さるせく子路がう 子 それでいあした  
はまりやとめ入せ 孔 朝よ晒落を辱して  
夕アふ死すとも是を可あり 子 それをよふ  
ざられども 孔 ハテは聖宅を家修よ入ると  
金の満と出まらる 子 それも満で極う  
も志のよ無遠慮とたかともま入るふん  
こいやアねく 孔 予のそるでたふの天厭く  
子 羽織を挈て雙登よまるとたの困窮如

はうぞぞいめく 孔 せとく 太  
くだの 孔 け人ふしとは病ある 太  
きの板が空あふ 孔 行さう 太 神樂  
称豆著麦でも喰ふ 太 せんふ 太 下果と云  
ぞと行ぐけよ正直 太 正直の二杯  
の盛よ 太 ぼく 太 ぼく 太 ぼく 太 ぼく 太 ぼく  
隣を 太 時よ 太 今夜の 太 世 太 界 太 へ 太 青  
樓へ 太 あれ 太 とも 太 何 太 屋 太 よ 太 仕 太 よ 太 小 太 親 太 ち 太 れ 太 へ







これい大出来くそんあうもあくるち  
とれむせサアくそんあ出さうせく  
者もモウフーウ釈者如斯夫  
不舍昼夜子そんあうもあづるあーた  
も目小かろりやせき

後座

青樓雜談

旧事記嘘八百卷萬八枚目曰天津浮橋  
之邊有數多娼家通之客神銀漢乘扁舟  
云中めも天野屋の保時冊とあんえつる全盛  
のちいんふ保時送字鶴鶴のとりのらして  
浮橋での一寸のるより候こ保くあせ  
後い大鼓未社の社と引連雪の居後  
船度り箸紙をことごとくしてある夜もく揚



げおもそののにすゝめ奉られいと多く  
の命を出して身受けしてたのころの別  
荘よ困つこひ並なはよのこ朝暮あす侍ましく多おほれ  
宿父しゆくふ國常くにつねまきのみたのみやう我われは是こゝ一ひと生な獨ひとり  
新あらなりそれよりくさうがゆるまひ男女おとこ交ま  
合あの乃のを始はめ因よひ根ねうう混まく沌とんととして  
久ひさらんあらしひ仕方しやうほうと甚おほくく交ま援えんめめく  
て二柱ふたはしらの由よし神かみとほひよ遠とほうう相あい流ながるる

女神めがみ男神おとこがみも今の身みよはくく思おもひたのみ  
やうむううの身みあれいどのよふふ仕しやうやうのや  
もあつたなりけ身みふあつて一ひと門かど一家いけさいに  
とげきもあうかぬの荒あ地ぢをえ立た天あま降ふりり乾か  
と立たく愛あい女め屋やをせんりのとそれよりあとの  
見みめよた女神めがみをあめめひてけひよ娼せう家かと  
あし後ごふされれの神かみの左ひだり邊へをせ給たまひひ一ひと亦またあ  
まはとて今の身みふふふをを神かみ清きよと名なけ



ト一是和國は流れの君の始あり其のち  
人の安ふらしては口室の津其外西の  
風このげくかぞふるふいとほわらず又  
小成さんあり一の後念河原は新をけらぬて  
娼家ありと 吉原大全 中山由豊堂新  
花とまゝ者おまゝの抱女を抱へて  
昌せとあり其後郭今の大門より又  
今の新吉原より其旅ひととありあよ

あて松の位の散うせぬ全盛中く予  
がふれ筆力なるぶととも思はずかくて  
人の聖達へ途中より三牧めて加ると花  
大門はけけかごらんおと拂ひ衣紋は  
ひ大門よ入とれたハ鞠如りかど滑  
かうら仲の町たぐみの長湯屋がらん世  
子先をみてあがり終へば又  
福屋ふどとり 福屋 壺よ祝 祝 とめてふ



前屋へ系者（きま）をとりらせして仕也（し）とほけ  
させ有べたか（た）の咄（はな）かどありてそ  
こくよ仕也（し）若者小批（せ）灯（あ）射（や）とせ紙（し）前  
屋（ま）一（い）あり二階（に）上（う）り皆（みな）く唐士（から）が唐（から）の  
とらる（と）る（ら）孔（こう）子（し）定（じやう）とせ入（い）る（る）太（たい）十二（じふ）家  
がよふにたりの中（ちゆう）す（す）神（しん）儒（にゆう）佛（ぶつ）とらふか  
ぬ（ぬ）が上（かみ）たでい（い）太（たい）これ（これ）でせうど（ど）儒（にゆう）仏（ぶつ）  
神（しん）ふあり中（ちゆう）と（と）太（たい）今日（けふ）はかたし（し）一（い）は二（に）

えでござらうます（す）太（たい）これへさこふよ一（い）は  
いもと一代（いち）ふい（い）太（たい）時（とき）よ定（じやう）の和（わ）國（こく）うたあ  
の（の）太（たい）一（い）ま（ま）めろこ（こ）なとくはたのます（す）何  
う（う）凡（ぼん）推（すい）あ（あ）よ（よ）源（げん）氏（し）胡（こ）月（げつ）小（せう）万（まん）葉（えつ）集（しゆう）こら  
らの和（わ）舟（しゆう）八（はち）重（じゆう）垣（げん）う（う）太（たい）投（とう）へ（へ）あ（あ）仙（せん）の香（かう）  
と合（が）んで白（はく）れと麓（ふもと）ふ（ふ）て城（じやう）と修（しゆう）んと  
欲（よく）とぞ（ぞ）太（たい）能（のう）ふ（ふ）出（しゅつ）た（た）ば（ば）は（は）と（と）太（たい）隣（りん）へ（へ）何（なに）んと（と）え（え）お（お）い（い）ん  
た（た）と（と）か（か）ん（ん）と（と）あ（あ）し（し）く（く）太（たい）隣（りん）へ（へ）何（なに）んと（と）え（え）お（お）い（い）ん  
け（け）ん（ん）と（と）出（しゅつ）て（て）お（お）











けさうん 因 おあゝ根うらたに上りしむせんらと  
 と林を 因 あげすせう 因 いでかふる 因 さやうあらしと  
 たらへりて糸うほせう ト まて 和 早苗 ト  
 や 禿 アイ 和 ちりとまや ト 何ゆらとせう ト  
 まる 釈 今夜へとんぶ ト 火宅の中 ト 火  
 こゝられぬ 因 火鉢の火が内外 ト 火  
 了 孔 是とあをげいよく ト 花 匣 後  
 野 ト 火 ト 出 ト 花 因 アイ 因 アイ 因 アイ

盆 ト をおのゝん ト 持ていさや 因 アイ 梅 次 ト  
 其 ト 盆 ト をのけて ト せ 因 おい ト んらと  
 さ ト げ ト せ 唐 押 ト ち ト せ 因 マ ト ア ト せ  
 ひ ト く ト 斗 ト 箭 ト 之 ト 妓 ト 何  
 足 ト 算 ト 也 ト ち ト 子 ト 娘 ト 中 ト 小 ト 女 ト 子 ト  
 の ト さ ト ん ト 一 ト 寸 ト 吸 ト け ト け ト て ト ん ト 女 ト 子 ト  
 ア ト し ト ち ト ん ト 一 ト 寸 ト 吸 ト け ト け ト て ト ん ト 女 ト 子 ト  
 コ ト し ト ち ト ん ト 一 ト 寸 ト 吸 ト け ト け ト て ト ん ト 女 ト 子 ト







是で始て一ツ進上因進上大不盡敬白  
 一ツははなれの大まふりのではざります  
 とは女何因女因内因わうらわげます新アサ  
中お来る  
因さよふあういひでたます ヲトづぐは  
因亭 是のせう一ツト虎のふを因 七で  
 如意満足因臨機應響因とこの盃の  
 息子おさうせくおまがめ有を仕よふト  
中花と因是のありうこころでざりゆせ因

こつちの杯因おひん一あけゆせう因 ころ  
 ち久因つらちが敵因あひを因 け失とり  
 とらち因ちうう大まふり因た因 其子  
 せんとどちるとめけやあふとの尻因吹り  
 れると因垂因ある因 真如因の月がとんとさ  
 多因さやあうあうあふあけます因  
 吞まぬをうだ因モウ おさめく因 世因ハイあり  
 がさうゆさうゆせ因ト因りて因 中因亭因らんふ



へどくろりあんとた<sup>□</sup>は戸あるたさ<sup>ホニニ</sup>今  
日あまのあかより中<sup>カ</sup>はまとなほした  
<sup>孔</sup>ソリヤア <sup>き</sup>きぶよろろ<sup>き</sup>まのふの西方<sup>川</sup>  
穽<sup>ニ</sup>出<sup>テ</sup>ぐるふの肉<sup>ヲ</sup>忘<sup>ル</sup>然<sup>ル</sup>閑<sup>ニ</sup>居<sup>テ</sup>  
居<sup>ル</sup>こののを<sup>子</sup>、<sup>残</sup>念<sup>ヲ</sup>因<sup>テ</sup>子<sup>ヲ</sup>奪<sup>フ</sup>と<sup>□</sup>それ  
もあれははさう殺<sup>ス</sup>生<sup>ヲ</sup>戒<sup>ハ</sup>破<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ル</sup>ぬ<sup>ル</sup><sup>孔</sup>ホニ  
和<sup>シ</sup>尚<sup>ホ</sup>ふん<sup>セ</sup>よふと<sup>思</sup>つ<sup>テ</sup>け<sup>テ</sup>大<sup>ニ</sup>け<sup>テ</sup>い  
ふ<sup>事</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>□</sup> <sup>釈</sup>おん<sup>ど</sup> <sup>孔</sup>釣<sup>不</sup>綱<sup>と</sup>ぎ<sup>の</sup>め<sup>の</sup>

へ網<sup>ヲ</sup>出<sup>テ</sup>お<sup>の</sup>が<sup>ア</sup>ん<sup>が</sup>か<sup>ら</sup>つ<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup> <sup>□</sup>ア<sup>ん</sup>  
と<sup>ら</sup> <sup>太</sup>ア<sup>ノ</sup> <sup>仏</sup>檀<sup>子</sup>あ<sup>る</sup>の<sup>の</sup> <sup>□</sup>こ<sup>の</sup> <sup>大</sup>笑<sup>ハ</sup>  
<sup>と</sup>あ<sup>る</sup> <sup>き</sup>よ<sup>ふ</sup>出<sup>た</sup> <sup>き</sup>され<sup>る</sup> <sup>□</sup> <sup>三</sup> <sup>あ</sup>ん<sup>と</sup>ん  
に<sup>を</sup> <sup>き</sup> <sup>ト</sup>吸<sup>付</sup> <sup>て</sup> <sup>水</sup> <sup>き</sup> <sup>ア</sup>イ<sup>太</sup> <sup>酒</sup>  
<sup>き</sup> <sup>か</sup>ら<sup>い</sup> <sup>き</sup> <sup>ま</sup> <sup>せ</sup> <sup>き</sup> <sup>□</sup> <sup>亭</sup> <sup>ひ</sup> <sup>と</sup> <sup>ら</sup> <sup>よ</sup> <sup>ら</sup>  
<sup>き</sup> <sup>よ</sup> <sup>も</sup> <sup>ほ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ら</sup> <sup>り</sup> <sup>は</sup> <sup>か</sup> <sup>う</sup> <sup>ふ</sup> <sup>あ</sup> <sup>と</sup>  
<sup>き</sup> <sup>酒</sup> <sup>潤</sup> <sup>身</sup> <sup>と</sup> <sup>董</sup> <sup>卓</sup> <sup>も</sup> <sup>す</sup> <sup>ご</sup> <sup>う</sup> <sup>だ</sup> <sup>ぞ</sup>



亭 おうんとんであひい出たさあぬ入り  
 ト不折ろしう三味せんおれあつと  
 万里佳隆五調五路治老治まよる  
 極もよふ出おされしうた  
 小暗ス孔 登樓万里春ぞ  
 有がさし  
 蘇の菩薩をりつところちく  
 一たん一  
 おれがどふた  
 佳 ぶふた  
 糸とあしう菊の  
 五 きくめつるへ遠かれど  
 カメ 五路さんおめりつところちくあんか

五 ハイ七ことをちつと  
 五 あんご蓬萊山を生  
 ころて来ふ  
 万 毎のほろが出さ  
 佳 下  
 早をいろうあんか  
 因 子代のためを湯  
 雞の松  
 孔 歳寒然後知松拍之後彫也  
 釈  
 色不異空空不異色  
 是もたふ事ぞ  
 四  
 モコそれいあんのりでは  
 釈 あんのり  
 ちおれもあしうぬ  
 釈 ヲヤをちうん  
 佳  
 時よちと鼓を始ぬ入  
 五 今酒ぐてらを







是の雅況 五 此の雅況 五 此の雅況 五 此の雅況 五 此の雅況 五  
陰子 佳 あんご 五 さらちをもち 佳 それ 五 それ 五 それ 五 それ 五 それ 五  
より 五 トひろ 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五  
ア 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五  
ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五  
つ 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五  
ま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五  
た 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五 ちとおま 五

あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
町 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
ひ 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
らん 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
尖 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
雅 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
ヤ 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
平 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
耳 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
哉 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
ち 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
と 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
そ 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
こ 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
を 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
か 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
は 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
げ 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
ま 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
せ 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五  
う 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五 あり 五















けつちふらんあんー禿 けつちふらんあん  
 ー孔 けつち大勢せいでへどもあらんぬぞ因  
 あんがふらんまゝにまけ釈せん  
 あり二物一ありしてこゝろがわかれが  
 早はやとゆるうそれと能くそゝりめ  
 小こきろが大あん釈マアこく観音あん  
ま経まよまふサア妙法蓮華経觀世音菩薩薩  
普門品第二十五 孔サアアんかりりてこゝ

大い どもそふいそれやせん釈せんあう釋  
 うふりふ大い それがよふこそ釋  
釈 引導佳 是ハ死んでるゆり釋  
釈 サア 云釈 それに釋  
カ それちうく小級ツル 十二釈 あん釋  
 ころそれやせん釋 十二釋 あん釋  
 ね釋 云釋 かん釋 あん釋  
 て二小大せい釋 かん釋 かん釋







申た<sup>和</sup>たをこそおあんあん<sup>太</sup>アイ<sup>和</sup>ぬー  
やアたーり中の所のちろと俵せ登でえ  
うけ中いーたよ<sup>太</sup>ソリヤア<sup>和</sup>り<sup>和</sup>たーり初て  
の月えのをん<sup>太</sup>ハテか<sup>和</sup>それくあの時の  
八幡<sup>ま</sup>がやうさやへ来てふよつてはき合ま  
来てはいでふあつて時どろろ<sup>和</sup>そのハ  
ゆんさんとやうもりちららぐ肉へ出あん  
あーたぬーアおをせう<sup>太</sup>揚弓<sup>和</sup>

度と出舎中<sup>和</sup>今でいどろちく出あん  
とく<sup>太</sup>ナニあまの川ぬらうらちく  
のあんまり来やせん<sup>和</sup>ぬーの事をころ  
ちやアよくあつていよま<sup>太</sup>どふーて<sup>和</sup>  
どふーてもさア<sup>和</sup>どこの女席さん<sup>和</sup>さ  
ありのせんが岩戸さんとやうのあで肉  
とばらうやうふああんして居はげと仕  
あんたといふ事をきいた<sup>太</sup>ナニそれ











まろやうにきいせうかうどもあぞまゐる  
し大せんあう神あうしり湯祈拵せうをそ  
ろがら和どふでもまひせうかうとんど  
一人でまゐるしちんしく大まきやア東  
よふがせんとい今月えんごう様さま祈うぬけけり  
あうぬく和う花とつたあんとあ大な  
のりだ今をせんといづらけこの和  
ふせく大出雲いづまの方かた縁えんだんの学まな作しふ

祈くのみ和かんみく和お前まへ形かたち違ちが屏びん  
らんちるとたうま祝いわ籠かごをかゝるん其のたのまにす  
考かんがるとま三よくね寐ねあんとたね和付つ生な安やす  
樂たのしく寐ね入いて居いるののをちえんとおせ  
た三あんまりほをおあんあんまうらうをれ  
で和そままもやアぬく枕まくらえで一い切い徑みちをかく  
りどもうろととろて何のみ斗たせいて  
居いるから三いふはまげの入いさんといふ女むすめ















ごしつふいふうかき中三むびとらますと  
おあんあん一<sup>釈</sup>むび方便とらて是も功徳  
ご<sup>ト</sup>あを<sup>テ</sup>も<sup>シ</sup>き<sup>ミ</sup>び<sup>ゴ</sup>嬉鬼の如くのみ  
たろ<sup>ッ</sup>が<sup>シ</sup>で成仏<sup>ノ</sup>女<sup>ヲ</sup>三<sup>形</sup>せんあ<sup>ラ</sup>お  
休<sup>ヤ</sup>あん<sup>一</sup>三<sup>ア</sup>イ<sup>一</sup>釈<sup>諸行無常としひぐくハ</sup>  
ハ<sup>ハ</sup>ら<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>涅<sup>レ</sup>槃<sup>ノ</sup>小<sup>キ</sup>よ<sup>ク</sup>ト<sup>ス</sup>入<sup>ル</sup>あ<sup>グ</sup>る<sup>夢</sup>く<sup>時</sup>る  
困<sup>十</sup>万<sup>億</sup>土<sup>の</sup>乃<sup>ハ</sup>か<sup>ウ</sup>て<sup>死</sup>小<sup>遠</sup>ひ<sup>ぞ</sup>と<sup>ご</sup>  
そ<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ひ<sup>だ</sup>れ<sup>ど</sup>困<sup>善哉</sup>我<sup>ハ</sup>これ<sup>釈</sup>

息子うららち<sup>三</sup>おん<sup>ワ</sup>り<sup>あ</sup>ん<sup>一</sup>困<sup>それ</sup>  
より<sup>ラ</sup>孔子<sup>さん</sup>が<sup>あ</sup>ら<sup>ウ</sup>逆<sup>レ</sup>鱗<sup>と</sup>そ<sup>う</sup>で<sup>小</sup>云<sup>ハ</sup>  
の<sup>夢</sup>が<sup>ま</sup>る<sup>一</sup>釈<sup>それ</sup>と<sup>ん</sup>で<sup>事</sup>だ<sup>太</sup>青<sup>樓</sup>で  
小<sup>云</sup>を<sup>い</sup>ひ<sup>の</sup>ら<sup>く</sup>の<sup>滑</sup>移<sup>本</sup>中<sup>の</sup>夢<sup>ハ</sup>  
て<sup>ん</sup>で<sup>あ</sup>の<sup>人</sup>少<sup>シ</sup>の<sup>似</sup>合<sup>ぬ</sup>一<sup>釈</sup>行<sup>む</sup>ア<sup>あ</sup>ら<sup>ウ</sup>  
め<sup>く</sup>う<sup>床</sup>を<sup>出</sup>る<sup>が</sup>衆<sup>別</sup>離<sup>苦</sup>一<sup>太</sup>邪<sup>見</sup>の  
室<sup>小</sup>い<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>で<sup>ご</sup>く<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>よ<sup>ん</sup>て<sup>も</sup>並<sup>れ</sup>ま  
ト<sup>ス</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>り</sup>と<sup>う</sup>が<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>ひ<sup>孔</sup>子<sup>三</sup>つ<sup>ぎ</sup>ん<sup>の</sup>上  
い<sup>ち</sup>や<sup>ト</sup>り<sup>ふ</sup>を<sup>吞</sup>あ<sup>ぐ</sup>る<sup>大</sup>き<sup>よ</sup>あ<sup>く</sup>た<sup>い</sup>と<sup>つ</sup>く<sup>め</sup>ら



こゝに只とを心こゝ 翠帳紅圍小大平樂の巻こゝ  
けりてはよめる 物ハ雖放蕩子未有うとふ由臣があせう  
ちで如此踏張と得るのも天の命ざるふ  
若くぬくが面のさるるの大学小ここれど  
も空突た予う如れ徳行の通子よへたそ  
きをあまてのうあんが糞土之墻の如く  
小行あつて圍隅小退て尸の如くどぶさ  
つてらるる危邦不入乱邦不居こんふ

不不居よふより寧歸與不ト出てけりふる  
何んであまをかくしはいぞぬく不あん  
はいとぬくあくなさをほく事がついぞある  
く入あくなさをほく事我程人のごとくか  
あらず悪さあうと悪人と思ふふいうぬが  
胸中のツゞ客人の善不善ハ踏張の勉不  
よる久不をざら其邪念を滅してあが  
くふさるる世人かとあしくくれれば其功徳











名  
高  
廿  
九